



Title	農村に於ける「社会的上昇勾配」の測定
Author(s)	金田, 弘夫
Citation	法經會論叢, 14, 81-103
Issue Date	1955-10
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/10756">http://hdl.handle.net/2115/10756</a>
Type	bulletin (article)
File Information	14_p81-103.pdf



[Instructions for use](#)

# 「社會的上昇勾配」の測定

—測定方式の設定とその適用—

金 田 弘 夫

## 目 次

序

一、「社會的上昇」概念と作業仮説

——問題の限定——

二、測定方式の確立

——階層化の基準と勾配率——

三、三部落における社會的上昇勾配の測定結果

——拓北・共和・佐呂間を素材として——

結 び

序

F. S. Chapin 及び W. H. Sewell 等が創定した「社會經濟的地位」(socio-economic status)の測定方式は、その理論的基礎すけの点に於て種々なる困難があるにも拘らず、その獨創性と、結果的に他の現象面と高い相關性を示めず効能を有する点からして、社會現象を

觀察分析・比較する有効なる一手段として次第に注目され、現在米国では殆んど全くかの「生活水準の測定」に肩随するほどの地位を確保するに至つてゐる。この点につき、少くとも理論的研究の面に於て世界的水準に達し、或ひはまたそれを抜く段階にあると云はれてゐる吾国の社会学に於ても、当然この種の測定方式のもつ意義と価値について決定的な批判が与へられるものと期待されるのであるが、不幸にして現実的実証的研究面において著しい立ち遅れを余儀なくされてゐる現下の情勢にあつては、さし当りこの種測定方式の確立と實際面への適用並にそれに対する種々なる吟味等が焦眉の急務とされる。かゝる意味から吾々は一昨年（一九五三年）北海道における三つの開拓部落を選定し、Chapin と Sewell の Socio-economic Status Scale に最少限度の修正を施したスケールと、これを改訂し更に荷重法に別途の考慮を施した所の都合四種のスケールを構成して試行的な測定を試みた。尤も、この研究の究極の目的は北海道の農村に最も適合した標準的な社会的地位の測定尺度を設定することにあつたのであるが、この調査においては、右の目的を達成するための予備的操作として、対象の測定自体よりも、むしろかゝる四種の相異なるスケールによつて同一対象を測定した場合に於て、「一般にスケール自体に狂ひがない限り、その結果はいずれのスケールによる場合にも相対的に一致した対象の実態を示めずものでなくてはならぬ」という前提命題に基き、果してかゝる命題の定立が可能であるか否かを事後的に実験検証することにあつた。その結果は各種スケールの特性が判明すると同時に、四種スケールによる測定値相互間に高い相対的の一致性を認めることが出来たのである。このことは、この種の社会測定において当然要求される測定法の内的妥当性の存在をしめす一つの証左として極めて重要であるばかりでなく、他面において、これに基いて、社会的地位にまつらふ多くの他の社会現象を副次的に解明する方式を設定する可能性を暗黙のうちに与えるものとして注目に値するものがあると思はれる。

本稿に於て取扱う「社会的上昇勾配の測定」も、実は右にのべた如き社会経済的地位の測定を繞る事後的実験研究の副次的産物の一つに過ぎないのであるが、具体的社会における社会成層の構造的特色を分析・觀察・比較する一手段としてその有効性が認められるので、こゝにその測定方式を明らかにし、またこれを実験的に適用することによつて把えられた北海道における三つの開拓部落の社会的特色の一端を明らかにして、諸賢の御批判を乞ふ次第である。しかし紙数の關係上、詳細にわたる説明は無理であるので、その要点のみに留めざるを得ない点、予め御了承を得なければならぬ。

(1) 社会学における計量的方法に対する批判としては、川島武宜著「法社会学における存在構造」昭和廿五年中の一稿がある。しかしそれは計量的方法一般についての法社会学的立場よりする批判であつて、Socio-economic Status Scale による計量法の是非についての所論ではない。

(2) 四種の SES Scale による測定値の相対的一致性については第五回関西社会学会で発表し、その概略は「社会学評論」第十八号に掲載。

## 一、「社会的上昇」概念と作業仮説

### ——問題の限定——

開拓部落における社会的上昇勾配の実態を計量的に把えるに先き立つて、予め明らかにしなければならぬ問題は、調査測定によつて把えようとする所謂「社会的上昇勾配」なるものが如何なるものであり、また如何にすればそれを測定的に把える可能性が見出されるかという嚮導理論を仮設的に構成し、これを満足させる測定方式を設定することによつて問題の範囲を限定することである。

先ず、「社会的上昇勾配」(social rising gradient) なる概念についてであるが、この概念は、「社会的上昇」(social rising) と「上昇勾配」(rising gradient) なる二つの概念に分解することの出来る一つの複合的な合成概念であると考えられる。そこで最初の「社会的上昇」なる概念についてみるに、こゝで「社会的上昇」(social rising, social ascending, social climbing) とは、「所与の社会構成体において、個人もしくはその集団が何らかの社会的優劣 (social superiority and inferiority) の相対的差異によつて形成される体系的秩序 (hierarchical order) に於て、既得の階層的地位よりも更に上位のそれに向つて階層の序列 (ranking) を攀登する向上流動現象である」と規定する。尤も広義において「社会的上昇」には、この定義中にも暗に示されている如く、一方に於て一つの相対的に低い階層的地位より、現存するより高い階層的地位に個人が「滲透」して行く所謂 "infiltration" による場合と、他方、既存のどの階層的地位よりも相対的に高い階層の序列があらたに形成され、これが「挿入」の形で附加される所謂 "insertion" による上昇なる場合とがある。前者は成層系列内部における個人の社会的地位の相対的変動であるに對し、後者は成層の増加と系列上下間の絶対的幅の増加にともなう社会的地位

の変動であつて両者は厳に區別しなければならぬ。こゝで取扱う上昇はもとより“infiltration”による場合に限らねばならない。それはもとより、測定化の便宜上の理由に基くものであつて、一般に“infiltration”による上昇現象の方がより一般的であると共に比較的に理解しやすいから、着手の順序としてこれを先に取り上げる訳である。従つて現象の起因を異にする“insertion”による社会的上昇についてはこゝでは問題の範圍外におき、改めて別途に考察しなければならぬ。

さて以上の如く、「社会的上昇」を個人の社会的優劣にともなう階層的地位の上昇現象であるとする時、このような社会的優劣を決定する因子は一体如何なるものであり、また一般にそれによつて形成される階層の秩序とその成層を上下する流動現象(mobility)は如何なる性格のものであるかという疑問が生ずる。このことは又逆に如何なる社会的標識(social indices)をとれば、個人の社会的優劣の差異によつて生ずる社会的地位(social status)の相違が見られるかという問題にも転換することが出来るのである。これ等一連の疑問に對しては、既に多くの学者による理論的な究明が施されてきてをり、またこれを実証的に検討した例も少くないが、その所説はもとより紛々としている落ちつくところを知らぬ事情にある。こゝで、その一々いついて縷説する余裕はないけれども、要するにかくの如く多数の学説が成り立つのは、社会の成層化を可能とせしめる根底について、極めて広汎にわたる多様性(diversity)が認められるからである。しかし乍ら、その根底のとり方の如何にかゝらず、最近、結局に於て社会成層は (1)権力(power) (2)威光prestige (3)生活機会(life chance)の三つの視軸から認識され得るものだという所説があらはれて、吾々の注目を引くのである。かゝる観点に立てば、「社会的地位」もまた、権力と威力と生活機會の總和によつてきまるものとされる。この場合、「権力」とは制度的に是認された所の個人の politico-legal authority と、他人の行動を統制したり或いは価値目的に對する手段を阻害したりすることの出来る略式的能力(ability)の双方が含まれたものであり、「威光」とは權威の重み(a weight of authority)が齎らす外的表象として、例えば称号(titles)とか、儀式における behavior 等の如く形式的に是認され象徴化されたもの、及び客觀的身分(objective status)に專屬的に潜在するが如きものが含まれる。これに對して「生活機會」は、所与の階層に屬する個人がその生涯に於て或る望ましい価値(desirable values)に接する可能性又は、望ましくならぬ憂事に遭遇する定言的危險に對する蓋然性(probability)とを齎らす諸条件であるといわれる。例えば制度領域を変えたと生活機會が変ると云われるが、それは結局個人の安全・健康・消費・心的秩序・非行・婚姻等々に對する

望まれた価値実現（接近）への相対的变化を意味するものであり、これ等の諸条件がその人の生活機会を一次的に規定していると見られる。しかるに、この理論からすれば、権力のあるものとなないもの、威光のあるものとなないものとの間に於ける成層化は可能であるが、少くとも、権力や威光のないもの相互の間に於ける社会的地位の差異は、「生活機会」を繞る相違を抜にして求めることは恐らく困難である。このことから「権力」や「威光」に対して「生活機会」は、吾人の社会的地位を規定する最も一般的にして基礎的な根拠としてその普遍性がみられると共に、そこにこれ等三者の社会的地位に対する下部構造的規定聯関が予定され、更に進んで、これ等三者に共通して、しかもそれを一元的に還元・統一せしめる契機として「社会的活力」なる概念に包摂される所の成層化を繞る社会的要素を求めることが出来る。「権力」といい、「威光」といい、「生活機会」といつても、それが結局に於て、社会成層や社会的地位を決定する基準として取り上げられるのは、要するにこれ等のものを通じて個人の社会的活力の相違が反映されるからであり、またこれ等のものが社会的活力の多様な変容の具体的表現に外ならぬからである。従つて社会的地位が何等かの社会的なるものゝ相違によつて生ずるとする時、この社会的なるものゝ相違は根本において「社会的活力」の質的量的変容として、これに還元することの出来る個人相互間の差異であるということになる。かくして、この様な差異を基準としてこれを何らかの意義をもつた社会的座標系列において見る時、そこに所謂社会的地位の座標体系の形成を見ることが出来るのである。かゝる観点から「社会的地位」を定義するならば、それは「個人もしくはその集団が所謂 social state をとる社会的座標体系の垂直軸において、その社会的活力の変容の値によつてきまる position であり、また当該社会におけるその locus である」と規定することが出来るであらう。こゝで云う「社会的活力の変容」とは、勿論、社会的生活力が具体的に種々なる形をとつてあらわれる場合におけるその様々なる実質的類型と各類型におけるその程度の差を意味し、「変容の値」とはかくの如くして種々なる形をとつて質量的にあらわされる社会的活力のもつ主観的客観的価値の優劣に対して与えられる社会的評価に外ならない。

所で以上の如く、個人の社会的地位を社会的座標体系において見る見方は、既に P. Sorokin のとる所である。表現法としては極めて幾何学的であるが、しかし Sorokin によれば、この社会的座標体系 (system of social coordinates) は幾何学的空間 (geometrical space) に於て取扱はれる座標とは根本的に性質を異にしたものであつて、しかもその垂直軸における上下の社会的流動は、「量的見地

(quantitative point of view) からすれば、その強度 (intensity) と全体性 (generality) との間には区別が設けられねばならぬものであり、垂直流動における強度とは、一定の時期において、個人が上昇・下降の運動によつて通過する垂直軸における社会的距離 (vertical social distance) 或ひは政治的・経済的又は職業的諸階層の数を意味するものであり……また垂直流動の全体性とは、一定の時期において、垂直方向にむかつてその社会的地位 (social position) を変へた個人の数を意味する」といふのである。更に彼は、この様な流動の強度と、流動者の全人口に対する比率によつて求められる垂直流動の相対的全体性 (一般性) を結びつけることによつて所与の社会における垂直流動の総指数 (aggregate index) を求めることが出来るとして、この部門における流動現象の測定化とそれによる比較の可能性を示唆しているのである。尤も流動現象の把握には、かくの如き量的面ばかりでなく、流動の径路 (channels)、流動の障害物 (barriers) 流動の人間的特性 (personal attributes) や経歴 (career) 或ひは流動の方向性 (incidence) 等についての詳細なる分析を不可欠とするが、一般的に云つて、垂直流動が「時代により場所 (社会) によつてその性質を異にし又強度を異にするものである」ことは Sorokin の豊富な歴史的事実の集積に基く実証によつても容易に肯首し得る所である。

以上吾々は、こゝで取扱はんとする「社会的上昇」についての概念を、Sorokin の所説を中心にして明らかにし、またこれを測定的に把へんとする場合の基本的諸条件を纏る若干の理論的前提について考察した。しかし乍ら、それは社会的上昇なる社会現象が一般に質と量との二面をもつており、量的には測定可能であるといふ事象の或る一面の特性のみに触れた憾がある。それは所謂「垂直流動の強度」と垂直軸において占める個人の社会的地位を、その社会的生活力の差異によつて把へる方法論上の問題とであつたと言はねばならない。所でこの垂直流動の強度なるものは、それが社会的上昇流動である場合には、所与の社会における個人の社会的生活力の差異に基く階層分化との関聯に於て、「上昇流動の難易性」といふ形をとつてあらはれるとすれば、逆にまた所与の社会はその上昇流動の難易性によつてその構造的な特色を明らかにすることが出来ることになる。もとより上昇流動の難易性は、上昇を阻止する要素や上昇の径路・方向等によつても制約されるものであるが、それ等を含めて、最も基本的にそれを規定するものは、所与の社会において一つの階層的地位より他のそれ以上昇する場合に於て客観的に要求される社会的生活力の質と量とである。それはまた、所与の社会において個人が一定の上昇運動をする場合に恐らく社会的に必要とされる垂直軸における移動の社会的距離の巾であるとも云へる。従つて、この様な所与の社会のも

つ構造的な上昇流動性こそ、こゝで言ふ所謂「社会的上昇勾配」に外ならないのである。

以上をもつて、こゝで取扱はんとする「社会的上昇勾配」なる概念についての考察を留めるが、これを実際に測定的にとらへる方式を求めめることはしかく容易ではない。

第一に上昇勾配を測定するためにはその前提操作として、当然階層的地位そのものの測定を不可欠とするであらう。又以上の所論からして個人の社会的生活力の測定も是非必要とされるであらう。しかるに、階層的地位には Isonis や Linton 等の所謂伝承的な ascribed status や後天的に取得される achieved status (積極的地位) の如き根本的に形成因と性格をことにする地位が考へられるのであつて、これを如何に操作するかと測定法上の根本問題となる。また、同一個人が成層系列に於て複数的な地位を同時に持つといふことがありうるが、この問題もこれを如何に処理するかといふ困難がともなふ。これ等の諸問題を一挙に解消して社会的地位の測定を行ふ様な方式は求め難い事情にあるので、こゝに一応の仮定を設けて測定化の方式をたてるより外はない。それは社会的生活を最も根源的に規定するものは社会的生活機会 (life chance) であるといふ見地から、生活機会を最も一般的に規定する諸条件を指標にとつて、これによつて個人の所与の社会における社会的地位を測定する方法である。所謂 I. S. C. (Index of Status Characteristics) —— 地位を示めず指標——を用ひる方式がそれである。この方式は Socio-economic Status Scale という形をとつて既に Chapin 及び Sewell 等が実際に適用しているものであつて、この方式を利用することによつて、上記の仮定を満足せしめるより外はない。

第二に社会的地位を階層的地位に轉換するためには、所与の社会における階層化の基準を求めねばならない。この基準はもとより出来る限り普遍性 (universality) をもつたものでなくてはならぬが、これを如何なる方法によつて求めるかと問題である。

第三にまた、社会的上昇の難易性を各階層毎に把へんとする時、その程度の差を如何なる方法で把へ、かつ表現するかと問題となる。これ等の測定上の操作の問題について一応の用意が必要とされるので以下この点について考察する。

- (1) 社会的流動現象で infiltration によるものと insertion によるものとがあるといふ説は P. Sorokin, Social Mobility, 1927 p. 133—134 参照

- (2) H. F. Kaufman, O. D. Duncan, N. Grasse, W. H. Sewell, "Problems of Theory and Method in the Study of Social Stratification," Rural Sociology, 1953, March, Vol. 18, No. 1



- (3) P. Sorokin 前掲書 pp. 136—137  
 (4) Sorokin 前掲書 p. 160

## 二、測定方式の確立

——ステータス・スコアの階層化基準と勾配率——

既述の諸考察から、ここでは社会的上昇勾配の測定に必要とされる操作上の手続について、簡単にふれなければならぬ。

### I 社會經濟的地位の測定尺度

ここで社会的地位の決定に最も大きな近似値をしめすものは結局 Socio-economic status score であるといふ仮定をたてたから、その測定値を基礎にして、個人の当該社会における社会的地位を規定しなければならぬ。

先ずその尺度であるが、吾々が三つの開拓部落を素材にして、その社会的上昇勾配を求めるために用ひた Socio-economic Status Scale は次の四種である<sup>(5)</sup>。即ち、

1 E. S. Chapin が一九三六年に發表した Socio-economic Status Scale に対し最小限に必要とされる若干の修正を加へたもの (Chapin's S. S. Scale)。

2 W. H. Sewell が一九四〇年はオグランマの標準農村を調査して構成したスケールに、必要な最小限度の修正を加へ、原型における荷重をそのまま使用せるもの (Sewell S. S. Scale)

3 Chapin のスケールにおける各項の荷重法を改め、正式の  $\Sigma$  法によつたもの (Chapin S. S.  $\Sigma$  Scale)

4 Sewell のスケールにおける荷重を正式の  $\Sigma$  法によつて与へたもの (Sewell S. S.  $\Sigma$  Scale) 以上である<sup>(5)</sup>。これ等四種のスケールに

よる測定結果は先にも触れた如く相対的に一致した対象の性格をしめしてくれるが、たゞ Sewell の S. S. Scale は目盛がラフである為に、佐呂間の如く等質的で程度の差の少い部落の場合にあつては、部落長の社会的地位のモデルがあまりよく出て来ないので、このスケールによる測定値は、上昇勾配の測定には用ひられない。

次にこれ等のスケールによつて測定された各部落における農家の Socio-economic status scores (SES, Score) を如何なる基準によつて階層化するかの問題であるが、これについては、右の SES, Score を如何なる操作基準によつて階層化すれば、所謂階層的的地位をめぐる理論を最もよく満足させることが出来るかといふ観点に立つて考察することが出来る。もとより Status Score の形で表現されるスコアの数値なるものは、そのスコアを取得せしめたスケールの性質並にその操作要領によつて意味づけられるものであるから、スコアを階層的に階層化する場合には、更に一歩進んで、尺度そのものゝ特色をあらかじめ検討してをくことが必要とされる。

Chapin 方式のスケールも Sewell 方式のそれも、I. S. G. をとつてある点に共通性が見られるが、その項目の取り方の範囲は、Chapin 方式のスケールに於ては、主に「居間の調度」に限られてをり、この中に「物的調度」と「文化表現物」をしめす十七の項目が編成され、更に居間の兼室の状態や、品物の状態を評価する若干の項目が減点方式をとつて附加されてゐる。これに対して Sewell 方式のスケールにあつては、Chapin の方式より項目の編成が多元的であり「社会的参与」(social participation) や「教育程度」「一人当りの部屋数」等が「居間の調度」に関する項目に附加されてゐる。かゝる相違は見られるけれども、結局これ等のスケールは、一面に於て吾々の日常生活における生活力の外見的な物的反映や無形の反映を素材に求めて量化するやり方であつて、対象のもつ最も現実的な生活機会の程度の差を危懼なく把へんとするものである。

## II 階層化の基準とその方法

かくして、スケールの特性からして、それによつて把へられた SES, Score は、所与の社会に於ける life chance に対する個人相互間の有形無形の力量の差異の外的表現であるから、この力量の差を capacity の大なる順に順位をつけて体系的に配列するならば、そこにはじめて階層化を行はんとする操作の基準が形成されることになる。

この系列を階層区分するに際して Chapin は五〇点ずつ均等間隔による均等区分方式をとり、上層中層下層をそれぞれ上下に二分する階層化の基準 (norm) をたてたのであるが、吾々はこの方式とは別に、Score 取得農家の分散度との関聯において標準偏差をとり、これを平均 Score にプラス・マイナスして中層の上下の限界を定める所謂「S・D方式」なるものを立て、階層化の基準とした。しかし乍ら、この方式は、当該社会における Status Score の平均値を中核とし、これを標準にして偏差を相関せしむるものであるから、結

局、階層化に際しては Status Score の数値(量)に強い制約を受け、肝心の「順位」的要素はウィークに働くという欠陥が見られる。上述の如く、こゝでいふ階層的的地位は Status Score の量の意味と、当該社会におけるその量の占める順位の二つの要素の相関によつてきまるものとされるから、右の方法は、たとへ統計学的に適當とされても社会学的には満足するに足る階層化の方式とはいへない。そこで、Status Score の「順位」と「量」の双方を巧みにファクターにとり入れて階層化を行ふ方式として、吾々は次の如き方法をとることにした。即ち、

I 所与の社会における Status Score の分布を变量の大なる順に列べ、同一变量のものはダブらせて「単純系列」を社会的座標の垂辺上に形成せしめる。

II この単純系列における数列の項数から「中位数」(median)をとる。但しこの場合同順位のものにあつては、累積度数によらない。III かくして中順位に立つものゝ Status Score がきまるから、これを当該社会における最高取得スコアと最低スコアからマイナスし、その数値を三で除す。得られた数値は中位点より上位の三段階における各層のスコア巾と、下位の三段階における各層のスコア巾であり、これによつて結局上層中層下層の各上下の段階巾がスコア値できまることになる。

手続はこれだけで極めて簡単なものであるが、これを数式でしめせば、次の如くなる。

I 母集団の順位系列(数列)を単純系列とする。

中位数  $M = \frac{a_1 + a_n}{2}$  (n は数列の総項数)

但し、n が偶数のときは中央の二つの变量の平均をとる。

II 各層段階の巾は  $\frac{a_1 - M}{3}$  でしめされ  $a_1 - M$  の絶対値を3で割つたものとなる。従つて

上位層の各段階の巾は  $= \frac{a_1 - M}{3}$  となる

下 " " "  $= \frac{M - a_n}{3}$  となる

但し  $a$  は順位づけられた項の変量

$a_1$  は第一順位の項の変量

$a_n$  は  $n$  番目従つて最低順位にある項の変量

尚この場合、同一スコアの変量の順位を累積度数によらず単純数列と見做すわけは、社会的場に於ては、同一変量のものは殆んど全く同一の社会的地位に立つものと考へられるからであつて、同一の position に於て横に分散する度数は、階層化のファクターとしては二次的な意義しかもたぬと考へられるからである。

### Ⅲ 上昇勾配率の算出方式

以上の階層基準によつて、吾々は部落の各農家の階層的地位を判定したのであるが、次に問題になるのは、各部落における社会的上昇勾配率を如何にして求めるか、その方式の設定である。

結論から先にのべれば、所与の社会における社会的上昇の構造的難易性即ちこゝに所謂「社会的上昇勾配」は、便宜上、これを“tangent”でしめすことが出来る。言ふ迄もなく tangent は直角三角形における垂辺を底辺で除することによつて求められるから、従つてこゝでは、社会的座標軸に垂直に列べられた各階層段階のスコア巾を垂辺にとり、更に底辺の上中下の三階層におけるスコア巾（間隔）の平均値をとれば、そこに tangent を求める要件が整ふ。而して、垂辺軸における各階層段階のスコア間隔は、不等間隔となつて出るから、結局各層における勾配率もその不等間隔の程度に応じて變つて来る。この場合、常に  $a_{10}$  が基準となつて、中層は常に  $a_{10}$  をとるが、これに対して上層と下層の tangent がこれと異つた数値をとる時、当該社会における階層構造のもたらす社会的上昇の難易の差異が表現されるのである。この場合  $a_{10}$  はあくまで程度の差をしめすマークであつて、例へば中層が  $a_{10}$  になるからといつて、中層の坂が極めて険しく、物理学的に普通の人には到底登れないほど峻険な急斜面であるといふのでは決してない。それはあくまで程度の差を表現するための手段にすぎず、物理学的な意味に制約されるものではない。

以上述べた如き階層化の基準と勾配率のとり方によつて一応社会的上昇勾配の測定方式とするが、勿論現実には常に動態的であり、極端に云へば個人の社会的地位は毎日の如く動揺してをり、それによつて各層の上昇勾配も變動している。これ等の變動形態に応じて上昇勾

配を測定する方式も考へられると思ふが、こゝでは一応靜態的に上昇分配を把へる方式のみについて明らかにし、次に三つの開拓部落における測定結果を明らかにしよう。

(1) こゝで修正を加へた四種スケールの構成内容については、「社会学評論」第十八号拙稿参照

### 三、三部落における社会的上昇分配の測定結果

この試験的研究の素材として、吾々が選択した北海道における三つの開拓部落とは、十勝の拓北部落(十七戸)共和部落(二〇戸)と網走の佐呂間町に点在する貧困農家にして生活保護法の適用を受けてゐる被保護世帯(二一戸)の三つである。拓北部落は約二十五年前拓北実習所を卒業した青年が集団入植して開墾・營農に従事した所であつて比較的質的条件の一定した典型的な畑作地帯である。また共和部落は拓北に隣接する開拓部落であつて共和と同様に典型的な畑作地帯に属するが、一部は開墾早々で殆んどマーヂナル・ランドに近い所もある。佐呂間の貧困世帯群の内容は区々であるけれども、その没落した生活の様子は各戸に極めて類似していると云へる。これ等の部落の実態については詳細にわたつて説明する余白がないが、前二者の調査に當つてはこの調査の外、農業経営分析をはじめ、社会的接触、社会連帯性、その他を合せて調査した。

先ず、四種スケールによる S. E. S. score を部落別に明らかにすると第一表の如くである。(第一表参照)

次に既に述べた階層化の基準を適用して、各部落における各階層間のスコア巾を求めると第二表の如くなる。

〔説明〕

この階層間のスコア間隔の求める方は既に数式にてしめたが、今拓北部落を例にとつて算出すると次の如くである。即ち、第一表の A 表の如く拓北における最高スコア TC 農家の一四四スコア (Chain S. S. Score) であり、最近は TP 農家の一二二スコアで、この間に同スコアの農家が若干ある。今これをダブラせて順位をつけると十七戸の農家は十一順位で終りとなる。この系列から、次 (コナ) の式によつて中位数 (Median) を求めると、六番目の TP 農家の五八スコアを得る。この五八を一応中層の最低におさえて、最高点一四四より五八を引いたものを三で割ると上層の上・下中層の上のスコア巾が出る。反対にこの五八から最低点の一二を引いたものを三で割ると中層の下、下層の上下各段階のスコア巾が出る。

第一表 四種スケールによる三部落の SES Score の分布 (1953年8月)

A 拓北部落 17戸 (北海道十勝・開拓部落)

□ は Median

農家符号	Chapin S.S. Score	農家符号	Chapin S.S. $\geq$ Score	農家符号	Sewell S.S. Score	農家符号	Sewell S.S. $\geq$ Score
TC	144	TI	106	TG	185	TG	179
TG	106	TG	106	TC	180	TC	178
TI	86	TC	105	TE	173	TM	175
TH	68	TH	97	TH	161	TI	162
TE	58	TP	97	TP	160	TN	161
TP	58	TE	91	TI	155	TH	158
TA	48	TJ	90	TM	155	TE	156
TB	46	TB	89	TQ	153	TA	156
TJ	46	TN	85	TA	152	TP	154
TM	46	TA	84	TB	150	TQ	146
TL	38	TM	79	TL	149	TJ	145
TN	38	TQ	79	TJ	148	TB	142
TQ	38	TK	79	TN	148	TL	138
TD	36	TO	76	TD	147	TO	135
TK	36	TL	72	TO	146	TK	134
TC	36	TD	71	TK	144	TO	133
TF	12	TF	68	TF	138	TF	128
平均	55.6		86.7		155.5		151.5

B 共和部落 20戸 (北海道十勝・開拓部落)

農家符号	Chapin S.S. Score	農家符号	Chapin S.S. $\Sigma$ Score	農家符号	Sewell S.S. Score	農家符号	Sewell S.S. $\Sigma$ Score
KB	68	KB	98	KB	167	KB	171
KK	64	KK	96	KI	160	KC	152
KC	62	KO	89	KC	157	KI	145
KJ	46	KC	87	KJ	147	KL	143
KL	44	KI	85	KM	147	KJ	141
KI	44	KL	83	KN	146	KH	139
KO	42	KK	82	KT	145	KD	138
KN	36	KN	80	KK	143	KK	137
KT	36	KE	77	KD	142	KN	137
KM	<u>26</u>	KM	<u>75</u>	KH	<u>141</u>	KM	<u>135</u>
KH	24	KQ	75	KL	141	KQ	134
KE	22	KT	72	KO	139	KO	133
KQ	22	KD	71	KQ	139	KT	133
KS	20	KS	70	KA	135	KE	129
KD	12	KH	69	KE	131	KP	122
KP	12	KF	68	KP	131	KA	121
KF	5	KR	68	KS	129	KS	120
KG	6	KA	67	KF	125	KG	115
KA	5	KP	67	KR	123	KR	114
KR	4	KG	66	KG	122	KF	111
平均	29.6		77.3		140.5		133.5

C 佐呂間貧困農家群 21戸 (北海道網走・佐呂間町)

農家符号	Chapin S.S. Score	農家符号	Chapin S.S. $\Sigma$ Score	農家符号	Sewell S.S. Score	農家符号	Sewell S.S. $\Sigma$ Score
SQ	16	SQ	72	SF	129	SF	132
ST	10	SS	72	SK	126	SO	131
SO	8	SP	71	SB	126	SU	126
SS	8	SO	68	SP	125	SP	121
SP	6	SL	66	ST	124	SK	119
SR	2	ST	64	SI	124	SD	118
SN	1	SU	64	SO	123	SI	117
SE	-6	SG	62	SQ	123	SQ	115
SF	-6	SN	62	SR	123	SS	115
SL	-7	SF	59	SG	122	SE	114
SD	<sup>M</sup> <sub>-s</sub> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">-9</span>	SI	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">58</span>	SM	122	SH	114
SK	-10	SK	58	SU	122	SM	114
SF	-12	SR	58	SH	122	SR	114
SU	-12	SH	57	SN	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">120</span>	SN	113
SG	-14	SE	55	SD	119	SB	112
SB	-15	SB	54	SL	118	SL	108
SI	-18	SD	53	SE	115	SA	104
SJ	-24	SJ	53	SJ	110	SC	103
SA	-25	SA	47	SS	108	SG	103
SC	-27	SC	46	SA	108	SJ	100
SM	-27	SM	46	SC	107	ST	99



第二表 各層スコア間隔

階層	拓 北 部 落			
	Chapin S.S. Score	Chapin S.S. $\Sigma$ Score	Sewell S.S. Score	Sewell S.S. $\Sigma$ Score
上層 { $\frac{上}{下}$	28.7 } 57 28.7 }	7.0 } 14.0 7.0 }	11.0 } 22.0 11.0 }	11.0 } 22.0 11.0 }
中層 { $\frac{上}{下}$	28.7 } 44 15.3 }	7.0 } 12.6 5.6 }	11.0 } 15.7 4.7 }	11.0 } 16.6 5.6 }
下層 { $\frac{上}{下}$	15.3 } 30 15.3 }	5.6 } 11.2 5.6 }	4.7 } 9.4 4.7 }	5.6 } 11.2 5.6 }
平均	44	12.6	15.7	16.6
階層	共 和 部 落			
	Chapin S.S. Score	Chapin S.S. $\Sigma$ Score	Sewell S.S. Score	Sewell S.S. $\Sigma$ Score
上層 { $\frac{上}{下}$	14 } 28 14 }	7.7 } 15.3 7.7 }	8.7 } 17.4 8.7 }	12 } 24 12 }
中層 { $\frac{上}{下}$	14 } 21.3 7.3 }	7.7 } 10.7 3.0 }	8.7 } 15.0 6.3 }	12 } 20 8 }
下層 { $\frac{上}{下}$	7.3 } 14.6 7.3 }	3.0 } 6.0 3.0 }	6.3 } 12.6 6.3 }	8 } 16 8 }
平均	21.3	10.7	15.0	20.0
階層	サ ロ マ 貧 困 農 家 群			
	Chapin S.S. Score	Chapin S.S. $\Sigma$ Score	Sewell S.S. Score	Sewell S.S. $\Sigma$ Score
上層 { $\frac{上}{下}$	8.3 } 16.6 8.3 }	4.7 } 9.4 4.7 }	3.0 } 6.0 3.3 }	6.0 } 12.0 6.0 }
中層 { $\frac{上}{下}$	8.3 } 14.3 6.0 }	4.7 } 8.7 4.0 }	3.0 } 7.3 4.3 }	6.0 } 11.0 5.0 }
下層 { $\frac{上}{下}$	6.0 } 12.0 6.0 }	4.0 } 8.0 4.0 }	4.3 } 8.6 4.3 }	5.0 } 10.0 5.0 }
平均	14.3	8.7	7.3	11.0

共

これを垂刃上にみて各階段階のスコアの範圍を求めると、その限界は次の如くである。

上層	上	115.3	Score	より	144.0	Score	迄……………間隔	28.7	Score	層間隔スコアは 57.4 Score
	下	86.7		より	115.3		……………	28.7		
中層	上	58.0		より	86.7		……………	28.7		} 44.0
	下	42.7		より	58.0		……………	15.3		
下層	上	27.4		より	42.7		……………	15.3		} 30.7
	下	12.0		より	27.4		……………	15.3		

他の部落についても、また他のスケールによるスコアについてもこれと同様の方法で極めて簡単に階層間隔スコアを求めることが出来る。第二表はその計算の結果をしめたものである。

さて以上の如く、農家の社会的地位をしめすスコアの値と順位とをファクターにとつて層化を試みた場合、上層中層下層を規定する各層の上下間隔の中がアンバランスになつて出る。今もし他の条件を一定又は無視し得ると仮定するならば、下層の最低の位置より、更に一段階層を昇るに要する Status Score の量とはそれぞれ同じではなく、中層のそれ又は上層の最低の位置より、最高の位置まで上昇するに要する Status Score の量とはそれぞれ同じではなく、一般にどのスケールによる場合にも、上位層に昇るに従つて相対的により多くのスコア量が必要とすることが判る。これを拓北部落について言へば Chapin S. S. Score による場合には、大体において「下層の下」に位置する農家は「下層の上」に位置する可能性を持つことになるが、他方「中層の下」にある農家が「中層の上」に昇る為には、スコア一一点のプラスでは不足で、少くとも最高一五点以上が必要とされることになる。このことは拓北部落においては、その社会的成層構造の性格からして、一般に上位に昇るほど相対的に多くのスコアを必要とし、上層になるほどその社会的上昇勾配の急なることをしめしてゐるのであつて、換言すれば上昇するにつれて、単位あたり、より多くの「社会的生活力」が社会経済的に要求されるものと考へられる。

かゝる点に着目して、各層の勾配率を算定してみると第三表の如くなる。この場合底辺には三階層のスコア間隔の平均値をとることは既にのべた通りである。

第三表 三部落における社会的上昇勾配率

A 拓北部落 (17戸)

	Chapin S. S.	Chapin S. S. ⅳ	Sewell S. S.	Sewell S. S. ⅳ
上層	tan 52° 20'	tan 48° 0'	tan 54° 30'	tan 53° 0'
中層	45° 0'	45° 0'	45° 0'	45° 0'
下層	34° 20'	41° 35'	30° 50'	43° 40'

B 共和部落 (20戸)

	tan	tan	tan	tan
上層	52° 40'	55° 0'	49° 15'	50° 20'
中層	45° 0'	45° 0'	45° 0'	45° 0'
下層	34° 30'	29° 20'	40° 6'	38° 40'

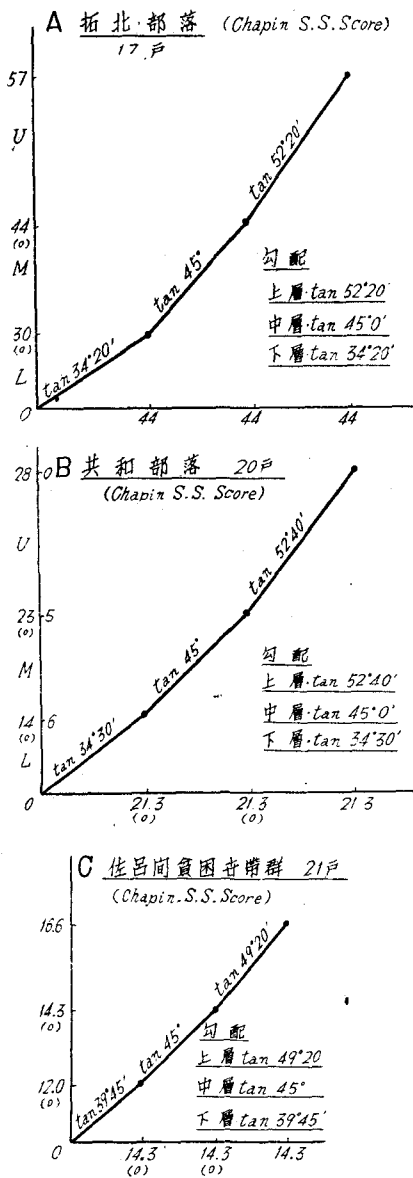
C 佐呂間貧困世帯群 (21戸)

	tan	tan	省	tan
上層	49° 20'	47° 20'		47° 40'
中層	45° 0'	45° 0'		45° 0'
下層	39° 45'	42° 10'	略	42° 20'

第三表によれば、スコアの種類が異ると、多少勾配率をしめす数値も変つて来るが、これはスケールの性質の相違から来るものであつて、Chapin方式のものにあつては一般にデーデルが荒く出るに對し、Sewell方式のものは細かく出るが、しかしいずれにしても結果は相對的に類似したものとなつて出て来る。とくにSewellの場合には中層農家のデーデルが比較的によく出るが、上層と下層はあまりよく出ない。従つて佐呂間の貧困世帯群にあつては「下層の下」に位置する世帯が寄つてゐるために、Sewellの「S. S. Scale」では殆んど全く識別力がないし、また下層階級社会にも上中下の階層があるとして取扱ふことは意味がないのでこの点は除外して見る必要がある。

今第三表にしめされた勾配率を图示して、各部落社会の特色を把へてみると次の如くである (Fig. 1 Fig. 2)。(数面の都合上图示は Chapin S. S. と Sewell S. S. の場合のみに限る)

Fig. 1 (上昇勾配率)



〔特色〕 1 一般に社会的上昇勾配は Chapin 方式による方が Sewell 方式によるよりも急角度に出来るがいずれも当該社会の構造的  
 特色をよくしめす。

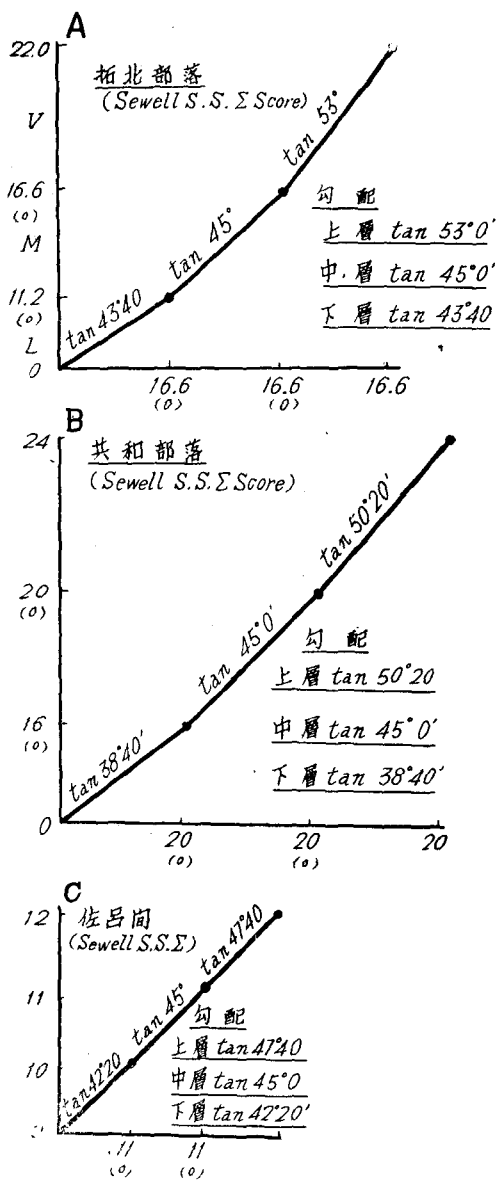
2 いずれの場合も、中層の勾配を四五度とし、これをコンスタントにして見ると、上層の勾配はそれよりも相対的に急であり、下層  
 はそれ以下の勾配をしめしている。

3 拓北部落に於ける各層の勾配率は、四種スケールによる測定結果を平均して、中層一に対して上層は一・三八、下層は〇・七とな  
 った上層は下層の約二倍の勾配比をしめす。上層になる程上昇が困難となる。

4 共和部落における各層勾配比は、中層一に対して上層一・三、下層〇・七で、上層は下層の約二倍弱の勾配率をしめすが、それは  
 拓北よりやや弱い。

5 等質的乃至は類似性の強い佐呂間の勾配比は中層一に対して上層一・二七、下層〇・八八で、上昇のカーブで直線的となり、各層

Fig. 2

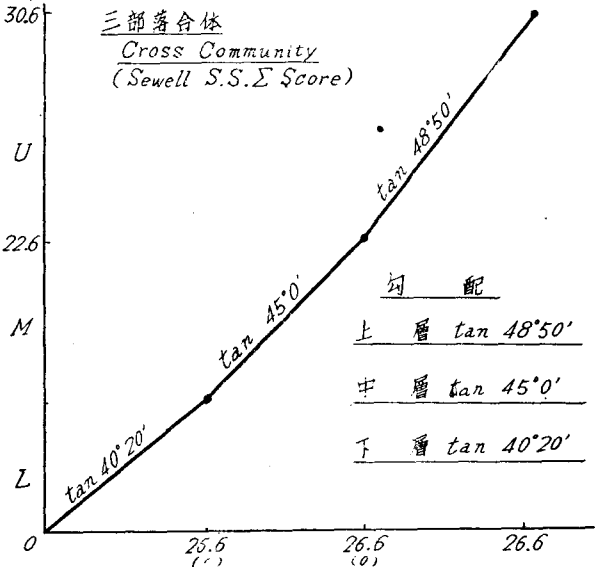
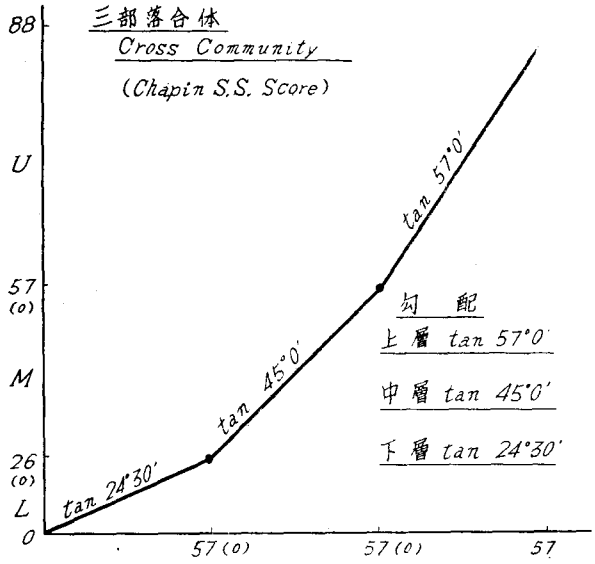


における勾配差は極めて少く、貧困社会の特性をよくしめしてゐる。

以上は各部落ごとに勾配率を求めたものであるが、次に、三部落合体して、所謂 cross-community を基準 (matrix) としてみると、次に図示せる如く (Fig. 3) 方式の場合は、単一部落を基体とする時より上昇勾配は遙かに急に出て来る。これによれば、その勾配比は中層一に対して、上層はその一・五四倍、下層は〇・四五倍となるが、Sewell S.S.M 方式による場合は平均化が働いて、各層の差異は数値の上では微妙にしか現はれないが、しかしその僅少差を通じて、充分特色を把へることが出来る。

以上は要点のみの説明に過ぎないが、この上昇勾配の測定にはもとより他の多くの社会的要素を捨象してゐる。例へば各層段階に横の分布する農家の度数とか、社会的上昇にともなふ個人の競争とか停滞の如き要素は含まれてゐない。そこでこの点を明らかにするため

Fig. 3

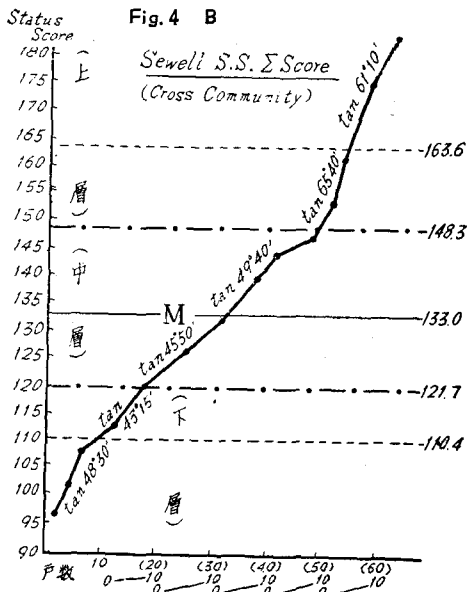
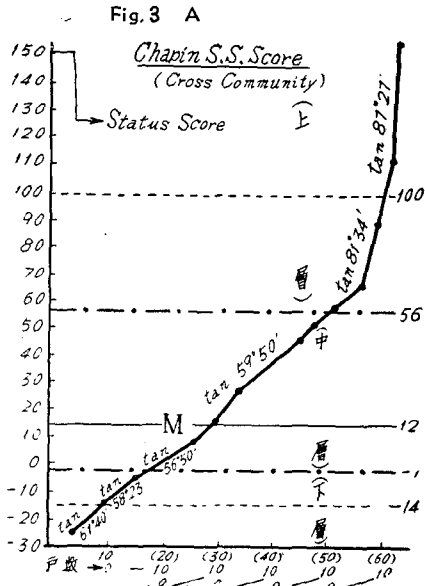


に構造的立場から、「今もし階層の中が広くて、所属者が少いときは、その階層を昇る人が少く、勾配は極めて険しい」ものとし、  
「また階層の上下間隔が狭いにも拘らず、多くの人が当該階層に留まるとすれば、その階層は停滞的であり、更に確率的立場からして、かかる場合は上昇する可能配が高いから上昇競争は緩かである」といふ仮説をたて、横に分布する戸数を要素に入れて分析してみると Fig. 4 の如くなる。

これによると、三部落合体した場合即ち拓北・共和・佐呂間の三部落を一つの基体において見た場合、(1)「下層の上下」は、いずれの

スケールによる場合も上昇がやゝ急であり (2) 中層においては、「中層の下」は緩やかでしかも停滞的であるが、「中層の上」にさしかるや勾配は急に険しくなる (3) これに対して上層は上下共に極めて急であつて上昇は甚だ困難であり多くのステータス・スコアが社会的に所要とされるのである。

この事はとりもなほさず、佐呂間の貧困世帯が他の社会との比較において、社会的上昇がより困難であるが、拓北・共和の中層階級にある農家が上層に上昇するには、更にそれ以上困難である事を意味する。その原因が奈辺に存するかは、もとより上昇勾配を測定しただけでは求める事は出来ないのであつて、その為には他の社会経済的諸条件を充分調査検討しなくてはならぬが、兎に角この様にすれば、社会的上昇の構造的難易性を測定することが出来ると共に、それを比較検討する素材を客観的に求めることが可能となるのである。



## 結 び

以上、こゝで社会的上昇勾配の概念の設定を試み、それに用いられる理論を作業仮説として、上昇勾配の測定方式を設定し、三つの開拓部落を素材にして、これが実際の適用を試みた。もとよりこの測定法は、既述の如く社会的上昇にとみなふ多くの事件を捨象したものであつて極めて一面的な、試行的事後実験の境を脱してゐないのである。しかし、この種手法による社会現象の客観的整理とそれによる独自の観察の可能性を多少なりともしめすことが出来たとしたら、それは一つの収穫と考へられる。もとより、こゝに明らかにした上昇勾配は、各階層の構造的差異の量的な面に重点をおいたものであるため、例へば各層の勾配率が全部同じに出た様な場合に於て、それを何を意味するか不明であるとも考へられるし、また三つの開拓部落の特色は、更に他の既存の農村における特色と比較しなければ一層明確にならぬという面も見られるのであつて、そこに今後更に検討すべき余地が残されてゐることは言ふ迄もない。しかし、何等かの尺度規準に従つて社会現象を客観的に計量化するということが、たとへ一定の条件、一定の限界内においてのみはじめて可能であるとしても、それは、社会学にとつて必要なことであり、更にそれが今後の理論的研究の発展と結びついて行はれるならば、それは社会学にとつて多大のプラスになるものと思ふ。

(一九五五・一・二〇)